

# 学校に登校していない児童生徒の新規発生の抑制に向けて —全ての教職員で行う発達支持的生徒指導の充実を通して—

令和7年度 生徒指導研究グループ

相談支援班 針生 智博 赤坂 圭介 佐藤 慎也

白石市立白石中学校 先崎 一史

石巻市立向陽小学校 菅井 麻衣

宮城県第二工業高等学校 和田 慧輔

## 1 研究の背景

- 全国、宮城県共に学校に登校していない児童生徒の出現率は高い状況が続いており、新規発生の抑制が必要であるとされている。
  - 学校に登校していない児童生徒のきっかけ要因は、何かに偏ることなく多岐にわたることが明らかになっている。
- 「不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書」（令和3年10月）

### <宮城県の新規数に着目した取組>

「不登校児童生徒への支援の在り方について」  
(令和3年8月)



宮城県の「不登校児童生徒数」の推移内訳（仙台市を除く県内公立小中学校）  
※平成29年度及び平成30年度「宮城県長期欠席状況調査」による

- ⇒ 全ての児童生徒を対象に「不登校を生まない、魅力ある学校づくり」を進めることが必要
- 「みやぎ『魅力ある・行きたくなる学校づくり』推進事業」(令和元年度開始)
- ・「学校が楽しい」肯定的回答8割（令和4年度以降）
- ・中学校では新規発生の抑制に有効と報告

### <教職員の実態>

実施時期：令和7年9月18日～10月17日

実施対象：総合教育センター研修会参加者及び研修員所属校教職員

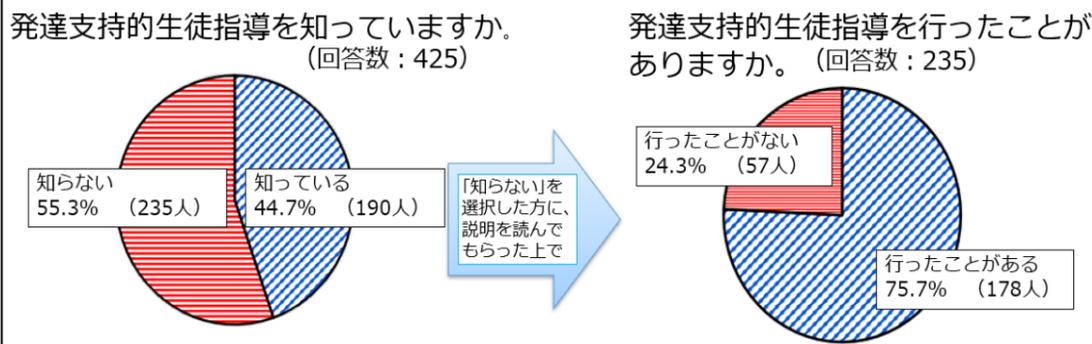


図1 発達支持的生徒指導の認知度、実践状況に関する教職員の回答

- 発達支持的生徒指導は広く実践されているが、その約半数は無意識に行われている可能性が考えられる。
- 取組事例では、「自己存在感の感受」に関わる回答が多く見られた。

## 2 意識調査

<児童生徒意識調査>（実施時期：令和7年10月3日～17日、実施対象：研修員所属校の在籍児童生徒）

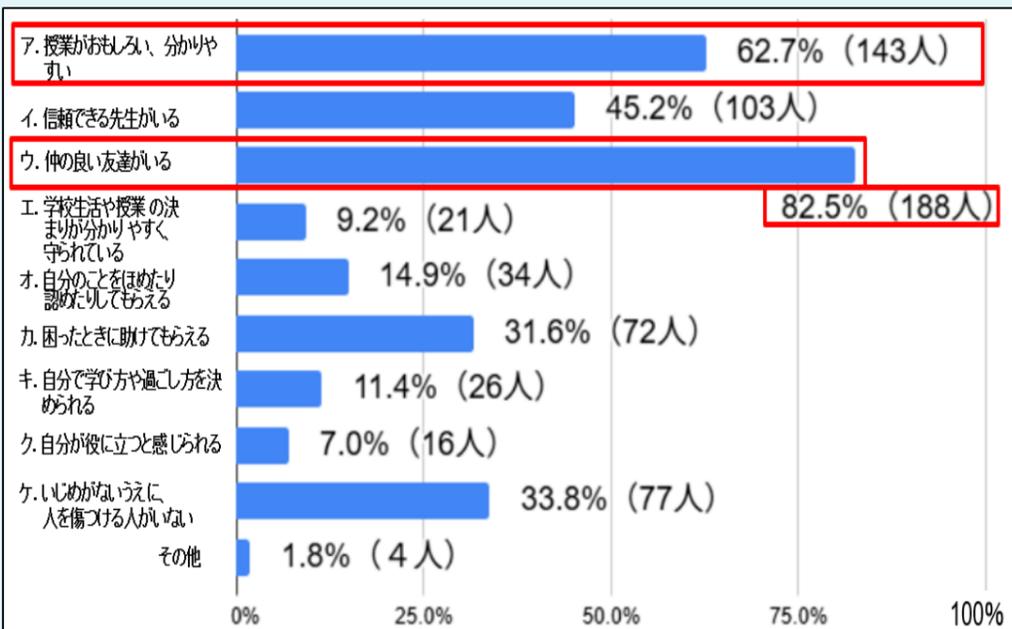


図2 「学校に毎日行きたいと思いますか」に「そう思う」と回答した児童生徒の安心して登校できる要因（複数回答）（回答者数：228人、総回答数684）

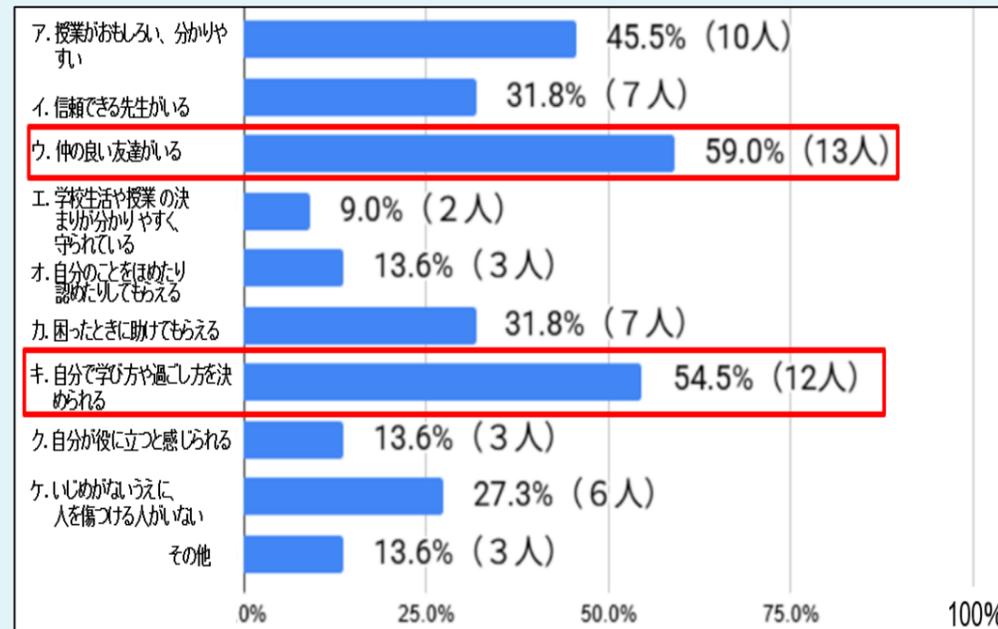


図3 「学校に毎日行きたいと思いますか」に「そう思わない」と回答した児童生徒の安心して登校できる要因（複数回答）（回答者数：22人、総回答数66）

「児童生徒が求める安心して登校できる学校」について

- 登校に対して肯定的・否定的どちらにおいても「ウ」の「友達」に関する回答が最も多かった。「共感的な人間関係の育成」は重要である。
- 登校に対して否定的な児童生徒の回答では「キ」が2番目に多く、「自己決定の場の提供」を求めていることが分かった。
- 登校に対して肯定的・否定的どちらにおいても「ケ」の「いじめ」に関する回答は3割程度あり、傷付けられることがない「安全・安心な風土の醸成」が求められている。
- 教職員意識調査の取組事例で多く見られた「自己存在感の感受」に関わる「オ」と回答した児童生徒は全体の1割程度であった。

学校に登校していない児童生徒の新規発生の抑制に向けて、児童生徒の実態を踏まえ、生徒指導実践上の四つの視点を意識した発達支持的生徒指導を充実させ、学校を児童生徒にとって安全・安心な居場所とすることが求められている。

## 3 研究の内容・方法

### <研究目標>

学校に登校していない児童生徒の新規発生の抑制に向けて、全ての教職員による発達支持的生徒指導の具体化を図り、居場所となる学校づくりの在り方を明らかにする。

## <宮城県の実態から>

○教職員の発達支持的生徒指導の認知度の向上と、児童生徒の実態を踏まえ、生徒指導実践上の四つの視点を意識した意図的な発達支持的生徒指導の実践の普及が必要。

→発達支持的生徒指導の必要性を理解した上で、具体的・意図的な実践を考えることができる機会を設定するとよいのではないかと。

## <実践調査> 「I-Basho (いばしょ) ラボ ～明日も登校したくなる学校を目指してできること～」

### <研修目的>

- 生徒指導について、理解を深めること。
- 児童生徒が明日も登校したくなるための手立てを具体化すること。

### I-Basho (いばしょ) とは

「I」には「私の」「いい」「愛」等の意味も込めた。また、愛着が持てる容姿の「Bashoロボ」を考案した。



### 実践の流れ (校内研修の形態で実施)

1. 生徒指導の理解を深める編 (15分間) (図5)
  - 学校に登校していない児童生徒対応における生徒指導の理解を深める。
2. 子供たちの発達を支える編 (30分間) (図6)
  - 実践する発達支持的生徒指導を考える、グループで明日から実践する取組を決める。
  - PDCAサイクルの重要性を理解する。
3. 振り返り (5分間)

### グループワークで出された取組例 (図7、図8)

- 児童生徒の実態を基にした様々な発達支持的生徒指導の事例が出された。
- 生徒指導実践上の四つの視点全てを網羅することができた。

### 実践調査事後アンケートより (図9、図10)

- 児童生徒の居場所となる学校づくりのために、他の教職員と発達支持的生徒指導について話し合うことに対する肯定的な感想が多かった。
- これまでの日常的に取り組んできた実践を生徒指導実践上の四つの視点に当てはめることで、自信を持って実践できるという感想があった。

### 3週間後アンケートより (図11、図12)

- 実践の頻度について「毎日1回以上」「週に2～3回」の回答を合わせると回答者全体の7割以上となった。
- 実践することで児童生徒が変容し、発達支持的生徒指導の有効性を実感できたという感想が多かった。
- 取組を継続することの重要性を感じたという感想があった一方、取組の継続や振り返り・改善に課題を感じるという感想もあった。
- グループワークで決めた取組以外の実践内容を自由記述で問うと、生徒指導実践上の四つの視点全てに関する取組が行われていた。

### 考察

- 居場所となる学校づくりに向けた働き掛けを考える際に、発達支持的生徒指導をより深く理解することで、これまでの実践を生徒指導実践上の四つの視点で整理したり、明日からの実践につなげたりすることができる。
- 児童生徒の実態を踏まえることで、より取組に具体性が増す。
- 研修会の実施だけでは、取組に継続性と発展性を持たせることは難しい。

## <考察に基づく提言>

- 児童生徒の実態を踏まえた発達支持的生徒指導の実践の普及による教職員の対応力向上
- 学校に登校していない児童生徒の新規発生の抑制につながる調査の継続・拡充

## 明日も登校したくなる学校の実現 学校に登校していない児童生徒の新規発生の抑制



図4 居場所となる学校づくりの全体図



図5 理解を深める編の様子



図6 全体共有の様子

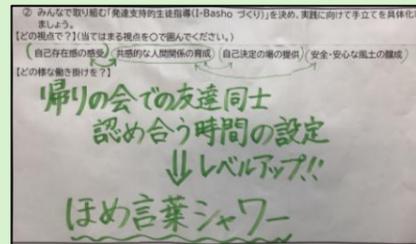


図7 発表された事例①

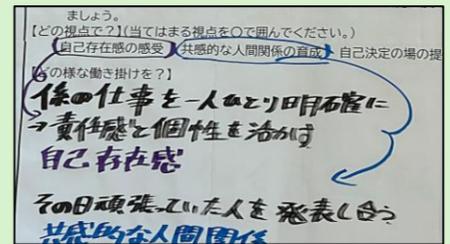


図8 発表された事例②

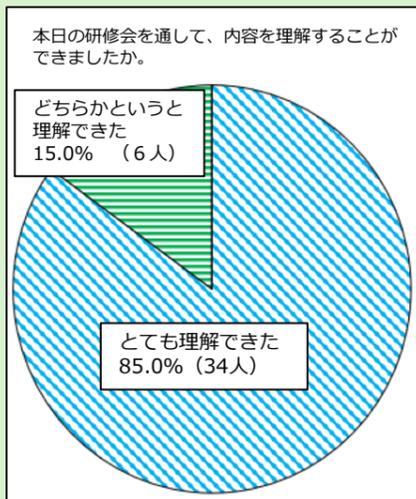


図9 実践調査事後アンケート結果 (n=40)

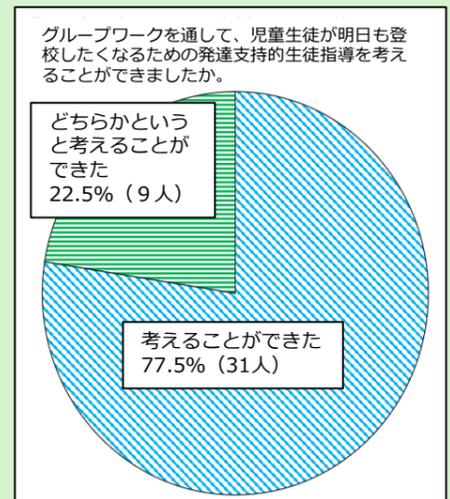


図10 実践調査事後アンケート結果 (n=40)

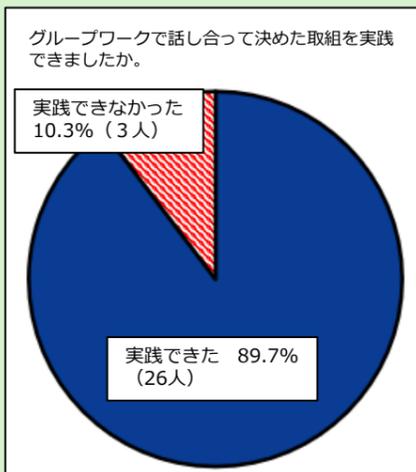


図11 3週間後アンケート結果 (n=29)

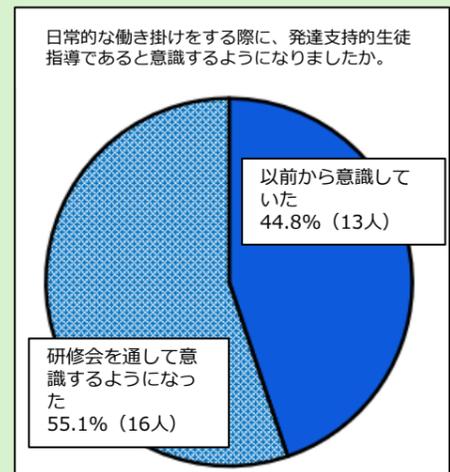


図12 3週間後アンケート結果 (n=29) \*1

\*1 調査結果の割合は小数第2位を四捨五入しているため、合計しても100にならない場合がある。

## <展望>

- 教職員の意識と行動の変容
- 居場所となる学校づくりの普及・定着
- 取組の日常化